

クルマエビの種苗生産事業

諸喜田茂充、新垣盛敬

沖縄県下の水温的にめぐまれた自然条件を活かして、クルマエビ類の養殖を志向する声が高まって、すでに、2、3の業者によって手がけられ、あるいはこれから計画している業者ができてきている。しかし、これまで種苗は本土から購入していたため、地元での種苗生産技術開発が急がれていた。

1970年、エビ類養殖の企業化を推進するために、琉水研八重山支所内に2000トン容量大型タンクが2面建設された。また、研修生を受け入れ養殖技術の普及と種苗配布を行なうための事業が開始された。

手始めに台湾より導入した親エビから種苗を生産し配布までの大略を次に報告する。

尚、大型タンクは建設途中のため、室内、2トン5トン及び500ℓ容水槽中で種苗を生産した。

材料、方法及結果の概要

(1) 台湾産親エビ

図1のように体長範囲16~21cm、モード18~19cmの親エビで、また、体重は平均70g前後であった。

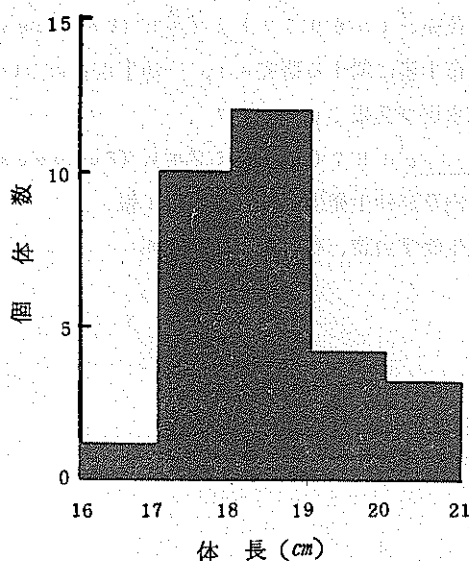
親エビを当八重山支所に輸送する際に手落ちがあり、やむなく那覇の琉球水研本所のクーラー室に1夜おいたのち、石垣に空輸したため80尾の内30尾が斃死していた。

また、親エビの選別がまずかったとみえてストッパー(交尾栓)のある個体は半分で、残りは交尾していなかった。

(2) 種苗産産経過

zoea 幼生飼育は珪藻 *Cheatoceros* sp. (連鎖状型、単細胞型) を屋外の500ℓ容プラスチック系の

円型水槽で培養して与えた。飼育方法は従来通り送気を行ない、毎日飼育水の1部をぬき、餌と新しい海水を添加した。zoea 幼生飼育途中、雨天で珪藻類が落ちたため、応急的に生貝肉をミキサーにかけ、そのこし汁と酵母を海水にとかけて投餌した結果、よく摂餌して次のMysis 幼生に変態した。また、Mysis 幼生からPost-larva にかけて、ワムシとブラインシユリンプを与え、Post-larva から稚エビまではブラインシユリンプを1部併用しながら貝肉とアフリカマイをミンチにかけ、海水に溶かして1日2~3回投餌した。



第1図 台湾産親エビの体長組成

第1表 台湾産親エビでの種苗生産経過

導入月日	尾数	斃死数	産卵尾数	フ化数	P _{3~4} までの生残	歩留り
5月8日	80	30	9	80万	24万	30%

種苗生産の経過を総括すると表1に示したように、40尾の内9尾が産卵し、フ化尾数は約80万尾であった。また、後期幼生になって3~4日までの生残は24万尾で30%の歩留りであった。

以後施設の不備、コンプレッサーの送気力の弱さ等で体長2~3cmの稚エビの大量斃死があり、結局、約2万尾の種苗を配布するに至った。

(3) 種 苗 配 布

1. 桐和商会 那覇市美栄橋2-3
約1万尾(体長3~3.5)
2. 垣花実記 宮古平良市
実験用、1万尾(体長1~1.5cm)

(4) 今後の種苗生産計画

200屯容大型タンク2面が完全に使用可能な時点から100万単位の種苗を量産し、業者への種苗配布を計画している。

技 術 指 導

1970年度からエビ類養殖を主体にクロチヨウガイ及スッポン等の養殖技術指導のために研修生を受け入れ、増養殖全般にわたる基礎的指導から種苗生産及び飼育管理等の実技指導のための研修制度が始められた。

次にこれまでに当水研支所で受け入れた研修生は次の通りである。

研 修 生 名 簿

氏 名	対 象	住 所	備 考
垣 花 実 記	エビ類	宮古平良市西仲	個 人
田 崎 盛 政	"	嘉手納村嘉手納273	"
多和田 真 周	"	那覇市崎山町1-83	会社委託
下 門 照 雄	"	具志頭村安里166	"
石 井 武 雄	エビ類、スッポン	石垣市大川405	個 人
仲 野 英 則	クロチヨウガイ	石垣市川平	会社委託
源 河 朝 吉	エビ類	宮古平良市	個 人